

# チャンピオンとして生きる —モハメド・アリ 神話の復活—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

史上最強のボクサーは誰か？モハメド・アリ（1942-2016）と答えると異論も少なくないだろう。だが世界中に勇名を馳せた史上最高のボクサーといえばアリの右に出る者はいない。

10代でオリンピックに出場し、金メダルを獲得して華々しくプロデビューしたアリは大言壮語の派手なパフォーマンスでたちまち人気者になる。予言どおり世界チャンピオンとなって絶頂を極めたものの、人種差別に抗議して黒人イスラム運動組織に加盟し、ベトナム戦争への徴兵を拒否して王座を剥奪され、ボクシング界から追放された。

それでも屈することなくどん底から這い上がり、やがて劇的な復活を果たす。アリは黒人解放と反戦運動の象徴的存在となり、アスリートの枠を超えて伝説のヒーローになっていく。

## 蝶のように 蜂のように

アリはアメリカ中東部に位置するケンタッキー州ルイビルで看板書きの一家に生まれた。本名はカシアス・クレイ。12歳のとき誕生日に買ったもらった自転車が盗まれる。警察署に届けに行くと担当の警官がボクシング・ジムのトレーナーをしていた。彼のすすめで入門し、自転車を盗まれた怒りをぶつけるように練習に打ち込んだ。

無敵のアリは地元のセントラル高校入学後、州大会で6度優勝し、17歳から2年連続で全米大会を制覇する。18歳でオリンピック代表に選抜され、

1960年のローマ大会で金メダルを獲得した。

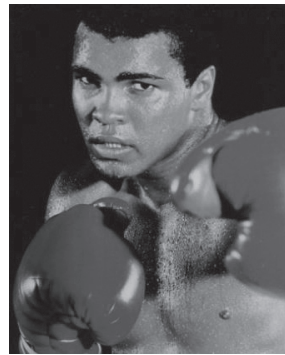
故郷の英雄として意気揚々と帰国したものの、黒人以外の反応は冷たかった。以前と変わらず白人専用のレストランで入店を拒否され、悔しさのあまり金メダルをオハイオ川に投げ棄てたという逸話が伝えられている。

プロデビュー後、対戦相手を倒すラウンドを予告し、そのとおりにノックアウトするボクサーがいると評判になった。急激に頭角をあらわして2年後にニューヨークでのデビューを果たし、破竹の19連勝という快進撃をつづける。

記者会見では対戦相手をからかった詩を読み上げ、口汚く罵り、まるで品位のない態度で物議を醸した。ほらふきクレイとマスコミから揶揄されても「野次や怒号のなかでリングに上がるのはいい気分だ」と豪語した。

当時の世相は人種差別の撤廃を求める公民権運動が台頭しつつあった。アリは1961年、黒人解放活動家のマルコムXに共感し、黒人イスラム運動組織ネーション・オブ・イスラムに加入する。

1964年、22歳になったアリに最大のチャンスが訪れた。世界ヘビー級チャンピオンで史上最強



モハメド・アリ

のハードパンチャーと謳われたソニー・リズトンに挑戦する。試合まえに「私は蝶のように舞い、蜂のように刺す。奴に私の姿は見えない。見えない相手を打てるわけがないだろう」と語っていたアリはリズトンを破り、念願の王座を奪取した。

## ベトコンに恨みはない

試合後、アリは記者会見でブラック・ムスリム（黒人イスラム教徒）の一員であることを公表し、正式に本名をモハメド・アリに改名した。指導者のマルコムXは奴隷化されるまえの黒人の宗教はキリスト教ではなくイスラム教だとして白人社会への同化を拒否する独自の活動を展開していた。だが1965年、演説中に凶弾を浴びて暗殺される。

1960年に勃発したベトナム戦争は米軍の参戦で激化の一途をたどり、泥沼の様相を呈していた。1967年、9度目のタイトル防衛に成功した25歳のアリは陸軍への入隊を命じられる。テキサス州ヒューストン徴兵局に出頭したものの、名前を呼ばれても一歩前に出ず、その場で逮捕された。

保釈後、マスコミから徴兵拒否の理由を聴かれて「ベトコンはおれをニガーと呼ばない」と答えた。ベトコンは南ベトナム民族解放戦線、ニガーは黒人の蔑称だ。アリは「なんの罪も恨みもないベトコンに銃を向ける理由はない」「いかなる理由があろうとも殺人に加担することはできない」と公言し、世間から非国民扱いされた。

政府に従わず、これほど公然と徴兵を拒否した著名人はアリ以外にいなかった。反戦運動に燃える学生たちはアリを熱烈に支持し、全米各地から講演の依頼が殺到した。

しかしヒューストン連邦地区裁判所は禁固5年と罰金1万ドルの判決を言い渡す。ヘビー級王座とボクサー・ライセンスを剥奪されたアリはこれを不服としてただちに控訴した。イギリスの高名な哲学者バートランド・ラッセルは「恐怖と弾圧に屈しないと決意したすべての人々の覚醒された意識。君はその象徴である」とアリを激励した。裁判闘争は4年間に及んだ。1971年、最高裁判所はついに無罪を宣告する。

リングに復帰したアリは世界ヘビー級王者への返り咲きを狙ったものの、長いブランクによって

思いどおりにいかなかった。それでも気力は挫けなかった。「自分にこう言い聞かせたんだ。絶対にあきらめるな。いまは耐えろ。そして残りの人生をチャンピオンとして生きる」と。

## キンシャサの奇跡の日

復帰して3年後の1974年、ザイール（コンゴ）の首都キンシャサで悲願の世界ヘビー級タイトルマッチが実現する。32歳のアリに対し、25歳の王者ジョージ・フォアマンは40戦無敗でマスコミから圧倒的優勢と報じられていた。

世紀の一戦は黒人のルーツであるアフリカ初のヘビー級世界戦として話題を呼んだ。キャッチコピーは「ジャングルの決闘」、ファイトマネーは当時のスポーツ興行史上最高の1000万ドル＝約30億円で両者に500万ドルずつ与えられる。

ふたりは早くから現地入りし、それぞれ入念にトレーニングを重ねていた。アリは黒人解放運動の旗手として現地の人々から讃えられ、街なかをロードワークすると子供たちがあとを追ひ、沿道の群衆から歓声が沸き起こった。

試合会場はサッカー場を改装した6万人収容の巨大スタジアムで黒人音楽フェスティバルが前夜祭として開かれた。ジェームズ・ブラウン、B・Bキング、ザ・クルセイダーズなど多彩なジャンルの錚々たるミュージシャンが集結する。試合当日、超満員の会場は異様な熱気と興奮につつまれ、その模様は世界60カ国に衛星中継された。

運命のゴングが鳴るとフォアマンは初回からKOを狙って攻めまくった。アリは第2ラウンド以降、足を止めてロープを背負い、サンドバッグ状態で次々と強打を浴びせられた。トレーナーが「ロープから離れる！足を使え！」と指示しても姿勢は一向に変わらない。

試合後、アリは「リングが動きにくく、フォアマンもかなり接近してきたので動きまわると自分のほうが先に疲れてしまうと思った」と説明している。とっさの判断でロープ・ア・ドープという捨て身の戦法に打って出たのだ。アリはロープにもたれて両腕で顎とボディをガードし、ときにはリング外にのけぞるようにスウェーして致命的なダメージを回避した。同時にフォアマンの後頭部

をクリンチして勢いをそぎ、耳元で「もっと強く打ってみろ」「おまえはすごい奴じゃなかったのか」とささやく心理戦を仕掛けていた。困惑したフォアマンはインターバル中に「一体どうなるんだ」と口走っていたという。

攻めているはずのフォアマンはラウンドが進むにつれて動きが鈍くなった。反撃の機会を待っていたアリは第8ラウンドで一気に勝負に出る。狙いすました電撃のワンツースがフォアマンの顎に命中し、一瞬でマットに崩れ落ちた。劇的な逆転KO勝ちに場内は騒然となり、アリは両腕を高く掲げて大観衆の歓声に応えた。

当初の予想を覆すアリ王座復活のニュースはキンシャサの奇跡として全世界を駆けめぐった。「私は神話をつくり、神話のなかで生きる」と語っていたように文字どおり新たな神話を創造し、その後も10回の防衛に成功する。

### パーキンソン病との戦い

1976年、アリはプロレスラーのアントニオ猪木との格闘技世界一決定戦で来日し、日本中の話題をさらった。超満員の日本武道館で開かれた対戦は時間切れ引き分けとなり、猪木の健闘を讃えて

自伝映画の挿入曲を贈る。これが猪木のテーマ・ソング「炎のファイター イノキ ボンバイエ」となってファンを歓ばせた。

引退したのは1981年、まもなく40歳になろうとしていた。通算成績は56勝5敗、このうち37勝がKO勝ちだった。3年後、現役時代の頭部のダメージが原因でパーキンソン病と診断された。手足の震え、筋肉のこわばり、緩慢な動作など運動機能が衰退し、長い闘病生活を送る。アリゾナ州の病院で74年の激動の生涯を終えた。

闘病中のアリは1996年、アトランタ・オリンピックの開会式に登場する。8万3千人が埋めつくした会場では地元アトランタ出身で公民権運動の先駆者であるマーティン・ルーサー・キング牧師が1963年のワシントン大行進で行った名演説「I have a dream」が流れ、人気黒人シンガーのステイービー・ワンダーがジョン・レノンの名曲イマジンを熱唱した。

54歳になったアリは聖火台への点火を託されていた。ぎこちない足どりで彼が姿を見せると、大観衆は一瞬ざわめき、やがて怒涛のような歓声と拍手に変わった。聖火のトーチを手渡されるとアリは震える右手を左手で支えながら聖なる火を灯した。